「春なくゆえこそはあらめ」の意味について

江口正弘

(一)

夏秋の末までおいごゑに鳴きてむしくひなどようもあらぬ者は名を付けかへていふぞくちをしくすきこ地する　それもすずめなどやうの常にある鳥ならばさもおぼゆまじ　春なくゆゑこそはあらめ　年たちかへるなどをかしきことに歌にも文にもつくるなるはなほ春のうちならましかばいかにをかしからまし

という枕草子「鳥は」の段の「春なくゆゑこそはあらめ」の部分の解釈を、今手もとの註釈書によってみると、次のような諸説がある。

(イ) 「夏秋までもなく物を、春の鳥と定めたれば、春なくべき故あるやらむと也」とある北村季吟「春曙抄」

(ロ) 「はるの季に鳴初るものなればこそ春のものとてもてはやさるるを夏の比をとろへ虫くひとよばるゝ迄ぞうたて有と也」と解する加藤盤斎「清少納言枕双紙抄」の説

(ハ) 「『年たちかへる鶯の声』など歌にも詩にも作っているのは、春を主として鳴く鳥だからであろう。」と解釈され、更に「春鳴く故にこそあらめ。次の『年立ち返へるなど――作るなるは』より打返して、この句に続けて解すべきである。」とされる金子元臣氏「通解」の説

(ニ) 「(鶯が)雀などのようにいつも見られる(平凡な)鳥であったら、そんなに残念にも思わ(ないし、悪い感じも強く)ないであろうが。(特に)春に鳴くものときまっているからであろう。(古歌にいうように)『年たちかへるあしたより待た』れるほど、興趣深い鳥として和歌にも漢詩文にも作ったりするようであるが、なんといっても春のうちにかぎって鳴くというのであれば、どんなにいいことであろう。」と口語訳されている田中重太郎氏「評解」の説

(ホ) 「それもただ雀などのように、いつもいる鳥なら、そうも思われまい。春だけなくせいだろう。『年たちかえる』など、趣のあるように、歌にも詩にもつくるのだそうだ！それもなお春のうちだったのなら、どんなにすばらしいだろう」と口語訳されている池田亀鑑氏「全講」の説

(I)

右の諸説から考えられる問題点は、

「春なくゆゑこそはあらめ」という叙述は、

(A)「――くすしき心地する。――さもおぼゆまじ。――こそはあらめ」と叙述が続いて、「あらめ」の下に叙述の切れ目があるとする。即ち「（くちをしくくすしきこと地するのは）春なくゆゑこそはあらめ」という意図の表現と解する。「評解」はこう解しておられるかと思われる。

(B)それ以前の叙述は、「さもおぼゆまじ」で切れていて、この部分は下の「――つくるなるは」という表現に関係する。即ち「春なくゆゑこそはあらめ――つくるなるは」と続く表現だとする。「通解」の倒置説はこう解しておられると思われる。なお「全講」は余りはっきりしないが、この句を下の「―つくるなるは」の前提句と解されているかとも考えられる。

（Ⅱ）

(A)「春曙抄」がそう解していると思われるが、「あり」を存在の意を表わすものとして、「ゆゑがあるのだろう」の意とする。

(B)「通解」の説の如く「ゆゑにこそはあらめ」と同意で「からであろう」の意味とする

(C)右の(A)・(B)以外の解釈をする、

のような点があると思われる。

そこで私は、右の二点、特に（Ⅱ）の方を主として考察し、この問題点について卑見を述べてみたいと思う。

（二）

「あらめ」の意を存在と解して、「ゆゑがあるのだろう」とすると、「ゆゑ」の意味から検討すべきであろう。枕草子には「ゆゑ」の用例は少く、「うすさこそそれにもよらぬはなゆゑに憂き身のほどを見るぞわびしき」（大系二三四頁）ぐらいしか目につかなかったが、他の作品では、蜻蛉に五例、紫式部日記に同じく五例、更級に四例あるようであるが、今ここではその用例を示す煩しさを避けて、先学の御研究によってみると、北山谿太氏「源氏物語辞典」では、

故（名）㊀わけ。いはれ。子細。㊁おもむき。味。風情。雅致。みやびやかなこと。風流の心。風流のたしなみ。

故（接尾）に因り。の為め。

と記され、「接尾」とされている方の用例には、「ただこの人ゆゑにて、あまたさるまじき人の恨みを負ひしはてはては（桐壺）」「にくからぬ人ゆゑは濡衣をだに着まほしがる類もあればにや、いたうもあらがひ聞えさせず。（紅葉賀）」などが記されている。

又大野晋氏によると、（注一）「奈良時代にはもとづくところを意味した。理由、原因、わけと訳すべきものが多い。……これは源氏物語にもある。……『この人のユエにあまたさるまじき人の恨みを負ひ』（桐壺）というのは、その人が原因で…の意である」と説かれ、さらに「よって来たる所あり、即ち当時重んじられていた一流の血統ありの意となり、そこから、それにふさわしい品格、教養心使いをそなえている意味を表わした」と説かれている。

そこで「ゆゑ」の意味を右のように理解し、「ゆゑこそはあらめ」の「あらめ」を存在と解すると、「春なくわけ（いわれ、原因、子細）があるのだろう」となるが、これでは文意にしっくりしないようである。

次に「通解」の説のように「ゆゑにこそあらめ」と解してみると、まず「ゆゑに」という用法は、

○これゆゑにはちすばのたまとなるらんむすぶにも袖ぬれまさるけさの露かな（蜻蛉、大系、一四五頁）

○にげないことゆゑに、あやしのこゑまでやは（同右三〇二頁）
―かの少女はまだ幼くてとても御志などにふさわしくないから、私のような年寄りの嗄れ声までおきかせすることなどはとても―（大系頭注）

また前記枕草子の「うすきこさそれにもよらぬはなゆゑに…」のように用いられて、「～ノタメニ」「～ニヨッテ」の意に用いられる事が多いのであるが、「鳥だからであろう」と口語訳するために「に」を補ってある所からみると、この「に」は所謂断定の助動詞と理解しなければならないかと思う。たゞここで不安に感じられるのは、断定の助動詞の「に」が果して省略されうるのであろうかという事である。「にこそあれ」の文例は、「よき折にこそはあなれ」（落窪、大系五三頁）「のちに物の中などにて見出でたるは、たゞをかしう、これにこそありけれと」（枕、大系二八一頁）のように多くの用例があって、わざ〳〵用例を記すまでもない程であろう。蜻蛉日記などにはこの型は二〇例近くもあるし、他の作品においても大体同じ事が言えると思うが、このような点から「こそあれ」の上にくる断定の「に」は省略されうるとはそうたやすく断言出来ないようである。ただ枕草子などに比較的用例が多く、普通「に」を補って解しているもの、例えば、「をのこは随身こそあめれ」（枕、大系九五頁）「秋の野のおしなべたるをかしさは薄こそあれ」（同一〇六頁）「主殿司こそなほをかしきものはあれ」（同九四頁）「位こそ猶めでたきものはあれ」（大系二三五頁）のような用例がある。これについても「に」を補わずに解すべきではないかと思って「国語学55集」（昭三十八年十二月）に卑見を述べたので、ここでは触れない事にする。

とすると「に」の省略と解する以外に方法があれば、その解決法を考えてみるべきであろう。

㈢

「春なくゆゑこそはあらめ」の「あり」が存在を表わすものでないとすると、判断を表わすとみるべきであろう。この判断を表わす「あり」については、拙稿「こそあれ考」（注二）にて一度卑見を述べた所であるので、多く重複する点があると思うが、前稿で言いつくせなかった点など補足する意味を含めて、こゝでその用法を概観してみよう。

まず判断を表わす「あり」の用法の中で、最も多く用いられるものは、「多くこそあれ」「学生にぞある」「かくこそあれ」のように、その判断の内容をすぐ上に示す用法である。これは「春なくゆゑにこそあれ」のように、「に」を補って解する場合が、この用法にあたるものであるから、ここではこれ以外で判断を表わす用法（判断の内容を文脈によって理解すべき用法）について考察する事にする。

(a)(1)思ひ出でてしのぶ人あらむほどこそあらめ、そもほどなく失せて聞き伝ふるばかりの末々はあはれとやは思ふ。（徒然三十段）
(2)今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もありこしものを（古今八八九）

これらの「あれ」は存在ではあるまい。かといって上の文節と補助と補助される関係にたつ、所謂補助文節を構成しているものでもない。即ち「多くこそあれ」などの「多くこそ」と「あれ」との関係でない。これらの用法については、早く（注三）佐伯梅友博士、原田芳

起氏のすぐれた御研究のある所である。今原田氏の御説明をお借りして、(1)の例からみると、「(A)思ひ出でてしのぶ人あらむ程」と「(B)聞き伝ふるばかりの末々」が対をなし、今それを(A)、(B)とすると、「Aこそあれ、Bはあはれとやは思ふ」となり、「あれ」の判断の内容を(X)とし、「あはれとやは思ふ」を(Y)とすれば、即ち「Aこそ(X二)あれ、Bは(Y)あはれとやは思ふ」とすると、「あれ」の判断(X)は、「あはれとやは思ふ」即ち(Y)の逆となる。「思いだしてしのぶ人がいる間こそあはれと思うだろうが、そんな人もまもなくなくなってただ聞き伝えるだけの子孫は、あはれと思おうか思いはしない。」の意であろう。即ちこれを公式化すると、「AこそあれBはY」の文型で「あれ」の判断の内容は(Y)と逆の意味、（「あさ」＝－Y）となる。(2)の例を図示すると、

(A)今こそあれ我も昔は(B)男山さかゆく時もありこしものを

となり、「あれ」の判断は(Y)と逆になる訳であるから、「Aこそ栄ゆかずあれ」の意となるのである。（注四）

(b) 所で、この文型（AこそあれBはY）に属するものを調べてみると、「Bは」の提示が省略されているものも多い。

(3)心ぼそき御すまひに、年さへ隔たりぬるよとあさましくおぼさる。(A)候ふ人もしばしこそあれ、(Y)いみじく屈じにけり、（増鏡 月草の花）

(4)我と等しからざらむ人は、(A)大方のよしなしごと言はんほどこそあらめ、まめやかの心の友には、はるかに(Y)へだたる所のありぬべきぞ、わびしきや。（徒然、十二段）

(3)は隠岐の島での後醍醐帝の様子を述べている部分で、二重傍線(A)「しばし」に対する(B)にあたる語が表現されていない。然しそれは「しばし」に対する語句である所から「年月が経過した今は」の意を補って、「お側につかえる人々も、しばらくの間は元気であったが、（長い年月を経過した今では）ひどくふさぎこんで元気がなくなってしまった」とでもなる所であろう。また、(4)の例は、普通「つまらないことを言っている間はまあよかろうが」と口語訳されているようであるが、これもこの文型からみて、「あらめ」の判断の内容は「へだたる所のありぬべき」と逆であり、また(A)に対する(B)を適当に補って口語訳してみると、「普通のたいした事もないつまらぬ事を話しあっている間は、隔たりも感じられないだろうが、（そんな事でなく、しっかりした事を話しあう場合は）真の心の友にははるかにへだたる所があるのは、情ない事だ」とでもなろう。

(C) このように「あれ」の判断が下の叙述と逆の意になるのは「未然形ばこそあらめ」という文型が、下に「BはY」又は「Bは」の提示が省略され、(Y)に対して表現されている場合も同じである。

「未然形ば」が右の(a)、(b)の場合の(A)にあたる訳である。

まず「(A)未然形ばこそあらめ、BはY」とA、Bの対照がはっきり示されている用例をみると、

(5)浮舟「かくのみ言ふこそいと心憂けれ。(A)さもありぬべきことと思ひかけばこそあらめ、(B)あるまじきことと皆思ひとるに、わりなく、かくのみ頼みたるやうにのたまへば、いかなることをし出で給はむとするにか、など思ふにつけて、身のいと(Y)心憂きなり。

（源氏、浮舟、大系(四) 二六七頁）

（このようにばかりいうのが大へんつらい事です。匂宮に靡くのが当然な事だと、私が思いこんでいるのならば、そうつらい事もなかろうが、あってはならない事だと十分心に考えているし、その上宮は、むやみに私がお頼りしっているようにおっしゃるので、どんな事をし出しなさろうと思われるのだろうと思うにつけ、私の身が大へんつらく思われる）

右の(5)の例は(A)と(B)が対照的に提示され、また、「あらめ」の判断の内容は(Y)の「心憂きなり」と逆である点は、右の(a)の場合と同じである。ところが、この「未然形ばこそあらめ、BはY」の文型は、「Bは」の提示が省略される場合も多い。今(d)としてその例をあげると、

(d) (6)外へいざ給へ。まろがまかる所へ。こゝとても、(A)まろならぬ人の見えばこそあらめ、かく出でてまかりありくほど、つれづれと待ち給ふ程、苦しうおはしますらん。（宇津保、俊蔭、大系(一)八一頁）

（私以外の人がくるならば、つらくもないでしょうが、（誰も来ないのだから）……つらくいらっしゃるでしょう）

の例では、「まろならぬ人の見えば」という(A)の提示に対する(B)が表現されていないが、ここでは「誰も見えねば」を想定し、それが省略されたものと解すると、右の(b)の場合と同じと考えられる。

こう考察してくると、右の(a)(b)(c)(d)は、(a)(c)が「AこそあらめBはY」と典型的な文型をもつもの、(b)(d)は、(a)(c)に比し「Bは」の提示がなくて、それを補って解しうるもの、即ち「Aこそあれ、（Bは）Y」とでもする事が出来るものであろう。そして(A)と(B)は共通点の上で捕えられた対をなす表現で、「あれ」の判断の内容は、下の(Y)と逆の意となるのである。なおここで注意される事は、「Aこそあれ」は「BはY」という下の表現に対し、逆接の前提条件句となっている事である。例えば「思ひ出でてしのぶゝあらむほどこそあらめ」の表現は、「聞き伝ふるばかりの末々はあはれとやは思ふ」という表現に対して逆接前提条件句となっているし、又、「しばしこそあれ」という表現は、「いみじく屈じにけり」の前提条件句となっているという事である。

「あり」が判断を表わし、その内容を文脈により理解すべき場合、「あり」を含む句、（例えば「Aこそあれ」の如き）が下の叙述に対し前提条件を構成する例は、この「Aこそあれ」の文型の外にもあるようである。次の「だにある」の表現もその一種である。

(7)わが身にあやまつことはなけれども、(A)すてられたてまつるだにあるに、(B)座敷をさへさげらるゝことの心うさよ。（平家、巻一、大系(上)、一〇一頁）

(8)身にかへておもふ馬なれども、(A)権威につゐて取らるるだにあるに、(B)馬ゆへ仲綱が天下のわらはれぐさとならんずるこそやすからね。（平家、巻四、大系(上)、二九二頁）

右の二例をみると、ともに「Aだにあるに、BはY」の文型で表現され、「Aだにあるに」は下の叙述「BはY」の前提条件句として用いられていて、「ある」の判断の内容は、「こそあれ」の場合のように、(Y)と逆の意にはならず、同じ方向である。即ち、（さて＝ヤ）ではなくて、（さるヘク）となっている。(7)の文例では「捨てられ申すのでさえつらいのに、（まして）座敷までもさげられることのやりきれなさよ」となり、(8)の例でも、「権威につゐて取ら

るるだにやすからぬに、――天下のわらはれぐさとならんずるこそ（まして）やすからぬ」の意となり、判断を表わす「ある」の内容は、下の叙述(Y)によって具体的に意味づけられうる事になる。

私はこのような「あり」が、下の叙述によって具体的に意味づけられるのは、この「あり」を含む句（「Aこそあれ」や「Aだにある」）が、下の叙述の前提句となっているからであろうと思う。このことを更に考察するために、「あり」に対するものとしての(Y)がその下に表現されていない例、又、「あり」を含む句が、下の叙述に対し前提句となっていない例について考察してみよう。

(四)

(9) 宮仕人のもとに来などする男の、そこにて物食ふこそいとわろけれ。食はする人もいとにくし。―中略―いみじう酔ひて、わりなく夜ふけてとまりたりとも、さらに湯漬をだに食はせじ。心もなかりけりとて来ずばさてありなん。里にて北面よりいだしては、いかがせん。それだになほぞある。（枕、大系、二四二頁）

右の例における「ある」は前の「物食ふこそいとわろけれ。食はする人も、いとにくし」の叙述をうけていると思われる。「それだになほぞわろき（にくき）」という意に近いと思われる。

(10)「今は如何、たゞ一くだりの御返事聞え参らせよ」など度々のたまへば、待従「昔だに(A)ありしに、まして(B)今は」などいへども、（住吉、校註日本文学大系、第五巻、六三二頁）

この例では、符号で示したように、「Aだにありしに、ましてBは」となって、「あり」の判断の内容と対をなす筈の(Y)がない。大体ここの文意は「まだ三の君に通いなさらぬ昔でさえ、姫はあの通りお聞き入れにならなかったのに、まして三の君と結婚なされている今は」とでもなる所で、「あり」の判断の内容はそれ以前の叙述をうけていると思われる。

このような例は「こそあれ」の場合にもある。

(11) 辨尼「仰言を、つたへ侍らん事は、やすし。今更に、京を見侍らむことは、物うくて。宮にだに、え参らぬを」と聞ゆ。薫「などてか。ともかくも、(A)人の聞き伝へばこそあらめ。愛宕の聖だに、時にしたがひては出でずやはある。深き誓ひを破りて、人の願ひを満て給はむこそ、尊からめ」との給へば、（源氏、東屋、大系(五)、一八五頁）

薫が弁に浮舟訪問の案内を依頼する場面であるが、「人の聞き伝へばこそあらめ」に続くかと思われる「Bは―」の叙述はない。しかし「未然形ばこそ～め」の句法は、「相坂のゆふつけ鳥にあらばこそきみがゆききをなくなくもみめ」（古今　七四〇）の意が、実際はゆうつけ鳥ではないという思想を含むように、その仮定と対応する思想を含んでの仮定条件に用いられるのが普通であるので、この場合、(B)は、「人が聞き伝える心配はないから」の意が想定される。また一方「あらめ」の判断は、下に(Y)に当るべきものがないから、後の叙述からは判断出来ないが、どうも前の弁の「もの憂」がっている叙述をうけていると思われる。従って文意は「あれこれ人が聞き伝えるならば、「もの憂」くもあろう。（だが、人が聞き伝える心配はないからそう「もの憂」がる事もないよ）」の余意を含んだ表現だろうと私は解するのだが、そうすると、この「あらめ」は前の「物うくて」あたりの叙述をうけていると思われる。

(12) 軒端「人の思ひ侍らん事の、恥づかしきになむ、え聞えさすま

じき」と、うらもなく言ふ。源「なべて、人に知らせばこそあらめ」、この小さき上人などにつたへ、聞えむ。けしきもなくもてなし給へ」（源氏、空蟬、大系㈠　一一七頁）

右の例における「人に知らせばこそあらめ」の「あらめ」の判断も、11の例と同じく、これに対する(Y)は下にはないようである。しかし「人に知らせばこそ」に対する(B)として「知らせないから」を想定してみると、「あらめ」の判断は、前の「恥づかし」という叙述をうけているようである。「（此の祕密を）もし他人に知らせるならば、（そのように）きまり悪くもあろう。（しかし他人に知らせる事などしないからそうきまりの悪がる事もあるまい）」とでもなる所であろう。

これら(9)～(12)の例における「あり」は、前後の文脈によってその判断の内容を理解すべき点では、文例(1)～(8)の場合と同じであるが、その(1)～(8)の場合の「あり」の判断の内容は、後の叙述(Y)と関係づけられたのだが、この場合はむしろ前の叙述をうけていると言わねばならないかと思う。

㈤

さてここで右の㈢・㈣の論旨を整理要約して、問題の「春なくゆゑこそはあらめ」の意味について考えてみる事にする。

㈢・㈣の部分をまとめると、「あり」が判断を表わし、その内容が文脈によって理解されねばならない場合、その文型が、「①Aこそあれ、②BはY」又は「①Aだにあるに、②BはY」などの型をもち、(A)と(B)は共通的の上で捉えられた対句的表現で、①が②の前提条件句の場合は、「あり」の判断は、後の叙述(Y)と関係づけられる。（「こそあれ」の場合は、〔あれ＝Y〕、「だにある」の場合は、〔ある＝Y〕）また一方、①だけで、（即ち「Aこそあれ」或は「Aだにある」）②がなく、従って、①が②の前提条件句などでない場合は、「あり」はそれ以前の叙述をうけた判断を表わしていると言いうるのではないかと思われる。

こうみてくると、これら文脈によって理解すべき「あり」の表わす意味は、文脈により様々な訳語をあてるべきであろうが、「あり」そのものの持つ意味は、抽象化していうと「ソウデアル」「ソノヨウデアル」の意と解してよいのではないかと思う。即ち、或る場合は、後に述べるべき事を意識して、又或る場合は、それ以前のある叙述をうけて「ソノヨウデアル」「ソウデアル」という意の判断を表わすものではないかと考えるのである。

ところで、今まで考察した論点に立って（「ゆゑこそはあらめ」の「あり」は、①存在を表わすのではなく判断、②「ゆゑにこそはあらめ」のように「に」を補う考えにはよらない③判断だが、その内容は前後の文脈によって理解すべき用法だ）「春なくゆゑこそはあらめ」の意味をみると、まずこの句は以下の叙述に対し逆接はしていない。又「(A)春なくゆゑこそはあらめ」とすると、「春なくゆゑ」の(A)に対すべき(B)も、「あらめ」に対すべき(Y)も見当らない。（「こそ」という語は『色こそ見えね香やはかくるる』（古今四一）『絵にかきたるをこそかかることは見しに、うつつにはまだ知らぬを』（枕、大系二三一頁）のように対照的な表現をとる事も多いので、それがしば〳〵解釈の糸口となる事があるのだが）従ってこの句は「Aこそあれ、BはY」の文型をもつもので、「Aこそあれ」が、下の句に対する逆接前提条件句となる用法ではないと考えられる。

とすると、この「あれ」はそれ以前の叙述をうける用法と考うべきであろう。そう解してみると、

…くちをしくくすしき心地する（それも雀などやうの常にある鳥ならばさもおぼゆまじ）

（それは）春なくゆゑこそはあらめ

となって、「あらめ」の判断は、「さおぼゆ」と同じく、「くちをしくくすしき心地す」をうけていると思われる。従ってそこの文意は「（鶯が）春なく（べき鳥である）からこそそうくちをしくくすしき心地がするのだろう」の意であろうと思うのである。

(六)

「春なくゆゑこそはあらめ」の文意を右のように解すると、「年たちかへる――作るなるは」の部分の解釈についても卑見を述べる必要があろうか。ここで考えられる事は、「作るなるは」が、Ⓐ「は」を終助詞で詠嘆を表わすものとしてここで切れていると解するか。Ⓑ「は」は係助詞で、「作るなるは」は下の「なほ春のうち――」へ続くべきものと解するか。のいずれかであろう。Ⓐの場合については語法上は特にふれるべき事もないように思うが、ただ、論旨の展開や文意の上からみて、「年たちかへる――作るなるは」だけが、前後と比較的関係が薄くつっこまれているように感じられるし、又次の「なほ春の――」への展開も何か落ちつかないように思う。では、Ⓑと解するとどうであろう。こうなるとまず「は」の意味用法について考察する必要があろう。「は」は他と区別するものであると学校文法などでは単純に片づけてあるようだが、これは様々な用法をもっているようである。しかしここではその用法すべてについて改めて考察するのはひかえて、この場合の「は」に限って考えてみたい。

私はこの「は」は次の用例の用法と同じで、条件を提示するものであろうと思う。

(13)髪ゆるゝかにいと長く、めやすき人なめり。少納言の乳母とぞ、人いふめるは、此の子の後見なるべし。（源氏、若紫、大系一、一八五頁）

この部分の口語訳を、麻生磯次氏の「註釈源氏物語」に「小納言の乳母と人が呼ぶらしいところからみると、この子の後見なのであろう」のように解してあるが、私も全くこのような「は」は「トコロカラミルト」「点カラ察スルト」とでも言いかえるとぴったりする条件の提示に用いられている用法であると思う。

(14)これがことをばかれにいひ、かれが事をばこれにいひ、かたみに聞かすべかめるを、我がことをば知らで、かう語るは、なほ人よりはとよなきなめりとや思ふらん、と思ふこそはづかしけれ。（枕、大系一七九頁）

（男はこの女のことはあの女にいい、あの女のことはこの女にいい、互に聞かせるらしいのに、女は自分がどういわれているかも知らないで、このように語る所からみると、やはり自分を誰よりも愛してくれるのだろうと思っているだろうかと…）

(15)見ぐるし。さのみやはこもりたらんとする。あへなきまで御前ゆるされたるは、さ思しめすやうこそあらめ（枕、大系二三〇頁）

（あっけない程簡単に御前の伺候が許された所からみると、それだけお気に召す訳があるのでしょう）

右の(14)(15)の「は」も同じ用法に入るべきものだと思う。従って「は」をこう解して、問題の部分を口語訳してみると、（但し「くすしき」の意

今は大系による）

「―雀などのようないつもいる鳥ならば、そうも思われないだろう。（それは、鶯が）春なく（筌の鳥である）からこそ、そう（残念で不可思議に）感じられるのであろう。『年たちかへるあしたより』などと趣深いものとして、和歌にでも、漢詩文にでも、作ったりするという所からみると、やはり（鶯の鳴く期間が）春の間（だけ）だったら、どんなにいいことであろう。―夏秋までなくのは本当に残念な事である―」

とでもなるだろうと思うのである。

以上浅学のため独断や思わぬ誤りもあるかと思われるが、大方の御教示を頂ければ幸である。

注一　解釈と鑑賞第二十四巻第十二号

注二　国語学　五十五集

注三　「みちのくはいづくはあれど」万葉語研究所収

注四　「いづくはあれど考」―平安時代文学語彙の研究所収―にある原田氏の御説明を関係部分だけ抜粋すると、

A こそ X…B は Y　X＝―Y

(1)夢にだに見えばこそあらめかくばかり見えずてあるは恋ひて死ねとか〈万葉、巻四、七四九〉

(2)今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もありにしものを〈古今、雑上〉

（用例(3)～(6)ハ省略スル）

この類は〔あれ〕または〔あらめ〕の上に、その内容として〔―Y〕を補うべきは明らかである。「こそ」は排他択一の強調である。ならば、「夢にでも見えるならそれを力として死なずに行けようけれど」となる。それ以上が排除されるのである。(2)ならば、Bが「さかゆく」ならばAは「さかゆかず」以外にないのである。

（熊本県立済々黌高等学校）